

# 私たちはメシアに会った

ヨハネ福音書1:35-42

【新改訳2017】

- 1:35 その翌日、ヨハネは再び二人の弟子とともに立っていた。
- 1:36 そしてイエスが歩いて行かれるのを見て、「見よ、神の子羊」と言った。
- 1:37 二人の弟子は、彼がそう言うのを聞いて、イエスについて行った。
- 1:38 イエスは振り向いて、彼らがついて来るのを見て言われた。「あなたがたは何を求めているのですか。」彼らは言った。「ラビ（訳すと、先生）、どこにお泊まりですか。」
- 1:39 イエスは彼らに言われた。「来なさい。そうすれば分かります。」そこで、彼らについて行って、イエスが泊まっておられるところを見た。そしてその日、イエスのもとにとどまった。時はおおよそ第十の時であった。
- 1:40 ヨハネから聞いてイエスについて行った二人のうち一人は、シモン・ペテロの兄弟アンデレであった。
- 1:41 彼はまず自分の兄弟シモンを見つけて、「私たちはメシア（訳すと、キリスト）に会った」と言った。
- 1:42 彼はシモンをイエスのもとに連れて来た。イエスはシモンを見つめて言われた。「あなたはヨハネの子シモンです。あなたはケファ（言い換えれば、ペテロ）と呼ばれます。」

## 【祈りながら考えよう】

- (1) ヨハネの二人の弟子は、なぜイエスについて行き、イエスの弟子となりましたか。
- (2) アンデレが、イエスはメシアであると確信するに至ったのは何によりますか。
- (3) イエスはメシアであると確信したアンデレは、最初に何をしましたか。

## 【解説】

### (1) 繰り返してキリストを証しすることによって、偉大な実を成らす

バプテスマのヨハネが最初に、「見よ……神の子羊」と叫んだ時には、その後何の結果ももたらさなかったように見える。ヨハネの叫びに耳を傾け、尋ね、信じたという人がいたかどうかについては、何も知ることができない。

しかし翌日（三日目）、彼が同じことばを繰り返した時、

「二人の弟子は、彼がそう言うのを聞いて、イエスについて行った」

この二人は、つき従って行った「このお方」に、実に丁寧に、また恵み深いお心で受け入れられた。

「彼らについて行って、イエスが泊まっておられるところを見た」

イエスは、その時に泊まっておられたところに二人を招かれた。おそらく、現代の家と比べるとかなりみすばらしい住まいであったことだろう。

「そしてその日、イエスのもとにとどまった」

この二人にとって、イエスがメシアであることを確信する交わりがなされたことであろう。

彼らは、主が行かれるところはどこにでも、従って行く者になった。この二人のうち、少なくともひとり（アンデレ）は、十二使徒の一人として選ばれた。

アンデレは、空腹の群衆を前にして、パン5つと魚2匹を持って来た少年をイエスのところに連れてくるなど、機転を働かせている（ヨハネ6:8-9）。

ペテロを導いて家族伝道の模範を示したばかりでなく、ギリシヤ人のためにも一役買い、異邦人伝道にも理解を示したものと思われる（ヨハネ12:21-22）。エルサレムに下る審判について、イエスに質問した弟子団の一人でもあり（マルコ13:3-4）、イエス昇天後の弟子たちの祈りの集団にも名を連ねている（使徒1:13）。

これらすべてのことは、バプテスマのヨハネの「見よ、神の子羊」という証しのおかげであった。この証しは、一粒の小さな種子であった。しかし、やがて偉大な実を成らすこととなった。



### (2) 主の救いの恵みを人にもたらず方法

この話は、教会時代において、人間の心に主の救いの恵みがもたらされてゆく方法の模範である。実に、このような証しによって、男も女も、回心させられ、救われてきた。これは、キリストを高めることによってであり、教会を高めることによってではない。また、儀式とか働き人を高めることによってでもない。

これは、人の心が感動を覚え、罪ある者を神に向かせる手段・方法によってである。この世には、そのような証しは、弱々しく、また愚かしく思えるかもしれない。

しかし、昔エリコの城壁は、雄羊の角笛がいつせいに鳴り響いた時に崩れ落ちたが（ヨシュア6章）、キリストについての証しも、この角笛と同様に、要塞を陥落させるほど強力である。十字架につけられた神の子羊の話は、すべての時代において、救いに至る神の力であることが立証されてきた。

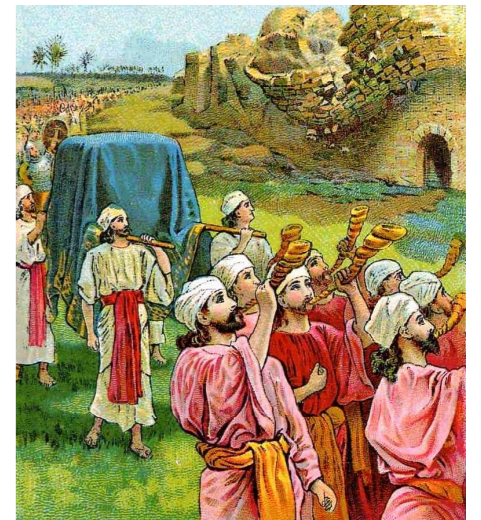
この世界のあらゆるところにおいて、キリストのみわざのために最善をなしてきた人々は、みな、バプテスマのヨハネのような人であった。彼らは、「私を見よ」、「教会を見よ」また、「儀式を見よ」とは叫ばなかった。

彼らは単純に、「子羊を見よ」と叫んだ。人間の魂が救われるためには、ただキリストだけを見つめるのでなければならない。

しかし、忘れてならないことがある。それは、もし私たちが良い成果を望むのであれば、真理を伝え、教えることにおいて、忍耐強くあり続けなければならないということである。

キリストを、「世の罪を取り除く神の子羊」として、繰り返して、繰り返して語らなければならない。恵みの話は、一言一言、繰り返して話さなければならない。

休みなく落ちる水滴は、石に穴をあけることを私たちは知っている。「わたしの口から出るわたしのことばも、わたしのところに、空しく帰って来ることはない」（イザヤ55:11）という約束は確かである。



角笛の響きと共にエリコの要塞は陥落する

### (3) アンデレは最初に何をしましたか

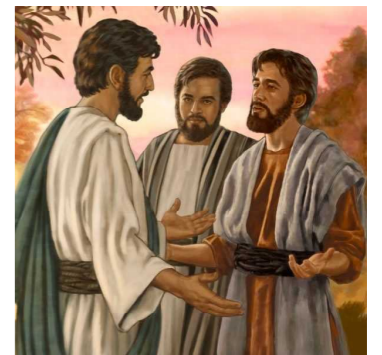
アンデレの心は、余りにも満たされたので、黙っていることができなかった。イエスに出会うと、身内の人々にもイエスに会って欲しいと願うもの。救い主を自分ひとりのものにしておくにはもったいない。

アンデレは弟子となるやいなや、自分の発見したことを、兄弟のシモンに告げている。彼は自分に最も身近で、仲のいい者に、これを伝えたいと急ぐ。

アンデレは、「私たちはメシアに会った」という心躍る知らせを持って「自分の兄弟シモン」のところへ急いで出かけて行って、ペテロを「イエスのもとに連れて来た」。アンデレのメッセージはきわめて単純であった。

しかし、神はその言葉を用いてペテロを捕らえた。このことから教えられるのは、必ずしも巧みな弁士である必要はない、ということである。

単純な言葉で、主イエスのことを人々に告げさえすればよい。そうすれば、あとのことは神が引き受けてくださる。ペテロの心の内に初めて光が照り輝き得たのは、神の摂理の中でアンデレの率直な証しのおかげであった。



### (4) 私たちはみな家庭宣教師である

神の恵みの福音を証しするという働きは、特定の人だけに任せるべきことではない。神のあわれみを受けた者は誰でも、神が自分の魂のためにしてくださったことを、喜びと感謝を持って証ししなければならない。

悪魔の力から解放された者はみな、自分の家族や友人のところに帰り、神が自分のために、どんなに大きなことをしてくださったかを、知らせなければならない

「あなたの家、あなたの家族のところに帰りなさい。そして、主があなたに、どんなに大きなことをしてくださったか、どんなにあわれんでくださったかを知らせなさい」（マルコ5:19）

すべてのキリスト者は、家庭宣教師である。家族、子ども、使用人、隣人、友人への宣教師である。

もし私たちが、主イエスについて彼らに語るべきことばを持っていないのであれば、私たちは自分の救いに関して、主イエスを本当に知っているのかを疑わしい。

説教者からキリストが語られるのを聞いたり、書物でキリストについて読むだけでは十分ではない。私たちは、実際にキリストに従って行き、キリストの前に自分の心を注ぎだし、キリストと個人的交わりをしっかりと保てなければならぬ。その時初めて私たちは、他の人々にキリストを語らずにはいられない自分を発見することになる。耳で聞いてキリストを知っているだけの人になってはいけぬ。